

新米おかあさん

「モシモシ おかあさん？」

受話器から若い女性の声

あらっ 間違い電話だわ と

一瞬 黙ってしまふ

息子にお嫁さんが来た

男の子ばかり育てた私にとって

女の子の声で

「おかあさん」と 呼ばれるのは

初めてである

あわてて

「ハイハイ」と 応えながら

くすぐったいようになうれしさが

こみあげてくる

ある日

こちらから電話をする用が出来た

「わたしだけど」で わかるほど

まだ親しくない

「おかあさんよ」と 言っても

彼女には もう一人おかあさんがいる

あれこれ考えているうちに

彼女が電話に出た

とつさに

「ハイイ 新しいほうのおかあさんです」

ああ 私…

あがつてる…

沢内の産婆さん

母ちゃんは
沢内の産婆さんだった
東京から疎開してきた
背が低くてちよつと太めの
産婆さんだった

母ちゃんは
喘息もちの産婆さんだった
迎え人に急かされて
雪道を喉を鳴らしながら行く
産婆さんだった

母ちゃんは
東京に帰りたくて
よく父ちゃんに頼んでいた
戦争が終わったらと宥められて
涙ぐんでいる姿を何度も見た

母ちゃんは
お七夜の祝いに呼ばれて行った

九月の暗い山道を迎えに行ったら
提灯の灯りが二つ見え
お爺さんに送られて帰って来た

おら家の孫娘は
難産だったのを産婆さんに助けてもらった
そういつてお爺さんは
母ちゃんに
何度も手を合わせて引返して行った

私たち一家は
戦争が終わっても東京へ戻らず
そのまま沢内の人になった
あの世でもきつと
母ちゃんは産婆さんをしているだろう
今は助産師と呼ぶそうだが
やっぱり
沢内の産婆さんがいい

朝顔の絵の風鈴

和裁上手の母つちやに教えられて

初めて浴衣を縫った夏があつた

青色と薄桃色の大きな朝顔が

白地にそちこち咲いた鮮やかな記憶

ホームセンターの人混みの中

立ち去れなくて

呼ばれる声のままに

朝顔の絵の風鈴を買った

吊した風鈴がベランダで

チリリ チリリとゆれて鳴る

朝顔の絵の風鈴よ

ゆらす風よ

ひらりと乗ったら

連れて行ってくれるか

母つちやと呼んで暮らしたあの家に

母つちやと並んで

チクチク チクチク 針を運ぶ

汗をふく仕草もいっしょ

神社の夏祭りを待つ想いもいっしょ

衿はこうしてつけるんだよ

台所の簾からのぞいていた朝顔

止まった夏に母つちやが笑う

今夜 熱帯夜

三日月とろり 浴衣の風よこい

朝顔の絵の風鈴 かすかな遠太鼓

母つちや

会いたい

母

足は歩けんようになるし

耳は遠くなるし

目も見えんようになるし

年をとつたら

ええ事は一つもない

と母は言う

でもね

歩けんようになつたから

家を忘れても迷子にならんし

耳が遠くなつたから

大嫌いな雷も

あんまり聞こえんようになつた

目が悪くなつたから

しみやら しわやら

たいして見えんようになつた

フフフと笑う母

これからいっぱい

楽しいことを見つけようね

お母さん

母のメール

夫婦ゲンカをして

くやしくて、くやしくて

行くあてなんてないから

チビの手を引いて

なんでもない顔をして 実家に帰った

突然戻ったのに 母は特に驚いた様子もなく

お茶を入れてくれて 梨を剥いてくれて

娘には 新聞紙で折り紙

夕飯はどうするの、と聞かれて

それまでには帰るよ、と答えると

それがいいわね、と笑った

今夜の夕飯にしなさいと

幾つものタッパーに手作りの惣菜

じゃあ、またね、と踵を返した私の背に

「がんばんなさいよ」

と優しい母の声

涙があふれて、振り向けなかった

がんばるよ

おかあさん

夕方、母は私達を駅まで見送ってくれた
紙袋いっぱいのお土産

母ちゃんの指

その鋭く折れた右手の指の間から
するりと箸が滑り落ちる

そのたびに

曲がった二本の指を叱りつけるように

懸命に開こうとする

「この指がなあ。この指が動かへんから箸が

うまいこと握れへん」

幼児がするように

ぎこちなく箸を拾い上げては

指の間に挟み込むようにして握り直し

一本の棒のように操って

ご飯を口に運ぶ

そのたびに

飯粒はばらばらと畳の上に落ち

三本の指が拾いに動く

折れ曲がった指を

働き者の勲章だなどと気休めを言うまい
体の一つ一つが

次第に思うに任せぬ恨めしさを

言葉で慰めることなど

日々の暮らしを闘うあなたには

苦痛でしかない

医者は

年だから仕方がない、と言う

もう伸びることのない二本の指は

折れ曲がったまま

今日も

肩身の狭い心地で

三本の指に身を委ね

叱られ続けている

「あなたは、だあれ？」

母の記憶から私が消えていく
いきなりだった

「あなたは、だあれ？」

振り向いて母を見た

にこにこ笑顔で私に訊いていた

娘ですよ

だれの？

お母さんの

私の答えに困った顔の母

どこのお母さん？

それでも時々は思い出し

名前を呼んでくれる

けれどいつも違う名前

よし子さん あき子さん

私はよし子さん あき子さんになって

母の娘になる

一人娘がいつの間にか三姉妹に
にぎやかになったね
お母さん

「それは 何の歌？」

お母さんが私に歌ってくれた

歌ですよ

聞いたことないけど

いい歌ね

母の記憶から私が消えていく

母の記憶から私が消えても

私の記憶には

まだまだ母との思い出が

綴られている

さようならの灯り

幼い日に母がしてくれたように
別れを繰り返す度小さくなる母の手を包む

また帰っておくれ……
声にならない後の言葉は白い息に変わった
車のエンジンがかかった時急に窓越しから
今まで羽織っていたシヨールを私の肩に掛けた

シヨールに顔を埋めるとほんのり温かく
母と過した時間が胸の奥に過ぎった

昨夜遅くに帰った私に夜食を用意し
食べ終わるまで横に坐っていてくれた
一泊しか出来ない里帰りは慌ただしく
何時も母を忙しくさせる事になった

自分の事もままならない程老いたのに
幾日かけてまとめた土産だろう

手作り味噌に漬物
今は作れなくなった米まで……

車が走り出すと母は懐中電灯を振った
高台の生家は灯りが遠くなるまで見える
私も車の窓から懐中電灯を振り返した

樹樹を透けて左右に揺れる灯り
きつとだよ きつと……

月に一度の帰りを一途に待つ
母の声となつてこの耳にとどいた

母の為の里帰りと思っていたのは勘違い
私が帰らせて貰っていたのだと
気付いたのはずつと後だった

月見草

月見草が咲いている

線路にそつと咲いている

どこまでも咲いている

幼いころ

ひとり月見草を摘んで遊んだ

五つするとき母が亡くなった

夕方病院に行つて

次の日の朝には帰つてきた

ただいまとは言わなかった

小学生になつて

だれかが言つた

夜、月見草を摘んだら

お母さんが死ぬんよ

まばたきが止まらなかつた

歯がガタガタ鳴つた

おかあちゃん

おかあちゃん

おかあちゃん

私のせいなんだ……

いい年をして

今でもふと

そう思うときがある

「ままおきやくさんだよおー」

ぼくには、おしごとがあります。

それは、ままにおきやくさんがきたことを、おしえることです。

おきやくさんがくると

「ままあーつおきやくさんだよおー。」つて
おおきなこえで一ばんにおしえてあげます。

ままはすごいよろこんでくれます。

「ありがとねえ。」

「しゅんがいるとたすかるな。」つてにここにこ
していつてくれます。

そうするとぼくもうれしくなっちゃう。

ぼくのうちは、ガソリンスタンドなんです。

ままは、おきやくさんがきてもきづかないこ
とがおおいんです。

しごとが、いそがしいのかな。

ままひとりで、みせばんしてるとき、いつ
もままが、

「しゅん、たのむねー。」つていいいます。

だから、まかせといてねつておもいます。

ぼくは、だいすきなキックボードやサツ
カーをやりながら、おきやくさんがくるのを、
みはつています。

おかあさんがよろこんでくれるのが、うれ
しいんです。

これからも、おしえてあげるからね。

母がぼくにくれるもの

母の本を読む声は

ぼくの気持ちをやさしくしてくれる

本の主人公のような気持ちにもなる

ようち園の時

ふとんに二人ならんで

まくらの上に本を置いて

読んでくれた母

ぼくはくつつきたくなつた

本を読んでもらうのも一つの楽しみだった

それ以上に

母のとなりにいる時間が好きだった

今、ぼくは五年生

図書館のボランティアで

読み聞かせに来てくれる母

クラスみんなに

本を読んでくれる母

背が高い方のぼくは

後ろの方で安座をして聞いている

きよりは遠いけれど

心はすぐそばだ

母の本を読む声は

ぼくの気持ちをやさしくしてくれる

さらに気持ちを強くもしてくれる

おかあさんのきもち

おかあさん、あのね
わたし、おかあさんになったんだ。
なんのおかあさんになったとおもう？

それはね、あさがおのおかあさん。

あかちゃんのたねをもらって

ふわふわした

つちのおふとんにねかせたよ。

おかあさんが

ゆめとをしずかにねかせるように

まねしてやってみたらじょうずにできた。

あかちゃんはいさくて

とつてもかわいかったよ。

一しゅうかんぐらいでめがでてきた。

みんな、ぶじにうまれてきてくれて

うれしかったよ。

ところが、だんだん

げんきがなくなっていくんだ。

びょうきになったのかな、

このまましんでしまうのかなって
しんぱいした。

しんぱいして、みずをたくさんあげたら
またげんきになった。

ああ、よかった。

のどがからからで、

おなかもぺこぺこだったんだね。

いまおかあさんは、

ひとりでわたしたち三にんを

そだててくれている。

きつとおかあさんも、

おんなじきもちでいるんだね。

いつもよろこんだり、

しんぱいしてくれたりしているんだね。

あさがおのおかあさんになって、

おかあさんのきもち、

すこしわかったようなきがしたよ。

だいすきなお母さん

空を見ると

お空にいるお母さんを思い出すよ

ごはんをはんぶんこしたこと

よるねる時、本を読んでもくれたこと

いっぱいだっこしてくれたこと

空の上はどんなところ？

おともだちはできた？

話したいことがいっぱいあるよ

もしも、まほうがつかえたら

空をとびたいな

空をとんだら

だいすきなお母さんに会えるかな？

おもしろいまま

ほんをよんでくれるとき、
よくまちがうまま。

しいんとしているから
わざとまちがう。

すると、もりあがる。

ひかるが、

「まま、おもしろい。」
という。

せなは、

「なんでまま、まちがうの。」
という。ままは、

「ごめん、ごめん。だって、みんなもりあが
らないんだもん。」

こんなおかあさんが、
おもしろくて、いいなあ。

大好きな場所

スースー

気持ちよさそうだな

スースー

どんな夢を見ているのかな

生後二ヶ月で家族の仲間入りした犬のチョビ

お気に入り場所は私のお母さんのひぎの上

わたしも小さい頃ひぎの上で

絵本を読んでもらったり

テレビを観たり

わたし専用のいすだったな

ぷよぷよしたエアークッション

わたしが大好きだった場所

今はチョビ専用

いい夢見ておおきなあれ

お母さんのひぎの上で

わたしのように

さいほうがとくいなママ

ママは、さいほうがとくい。

きれいなぬのを買ってきて、

カタカタカタつてミシンをかけて

わたしのふく、

お姉ちゃんのふく、

いもうとのふく、

ママはいろいろなものを作ってくれる。

さいほうをしている時のママの顔、

本当に楽しそう。

きつと

わたしたちのよろこぶ顔をそうぞうして、

わくわくしながら

作っているんだろうな。

初夏のちよつと寒い夜

初夏のちよつと寒い夜

お母さんが

「毛布だそうか」

と言った。

お姉ちゃんはお出してもらったけど、
私はあつがりなので断わった。

おフロを上がったら

私のベットのの上に毛布があつた。

かぜをひきやすい私を

心配してくれたのだろう。

「いらないうつて言ったのに。」

ぶつぶつ言いながらも

なんだかちよつとうれしくて

その日の夜

毛布をかぶって

だらだら汗をかきながら寝た。

母のカレンダー

母のカレンダーには

予定がたくさん書いてある

空欄のほうが少ないくらい

予定がたくさんつまっている

母のカレンダーには

予定がたくさん書いてある

私の中学校の予定とか

習い事も書いている

母のカレンダーには

予定がたくさん書いてある

二人の姉の高校や

バイトのことも書いている

母のカレンダーには

予定がたくさん書いてある

自分の仕事の内容と

時間帯まで書いている

母のカレンダーには

予定がたくさん書いてある

休むひまはあるのかな

一息つく時間はあるのかな

毎日頑張るお母さん

私ももつと頑張るよ

家族皆も頑張るよ

ニワトリのお母さん

スーパーにたくさんのたまごがならんでいる

ニワトリのお母さんが産んでくれたたまご

全部のたまごにお母さんがいる

このたまごを温めたらひよこになるのかな？

ニワトリのお母さんはかわいそう

一生けん命たまごを産んだのに

すぐにたまごを人間に取られてしまう

ひよこにも会えない

ママはスーパーでたまごを買ってくる

私はたまごを食べる

ニワトリのお母さんごめんなさい

大事にいただきます。

ガッツポーズ

どうしてなんだろう。

うちのお母さん、

わたしもう三年生なのに

こんなに大きくなったのに

だきついてくるんだ。

「なんでいつもそうするの？。」

ってわたしが聞いたら、

「だって大すぎでたまらないんだもの」

って言った。

わたしは心の中で

「やっぱりな」と

ガッツポーズをしたんだ。

かみひこうき

ぼくがわるいのにな

ママのせいにしたら

ママは

角だして おこった。

あやまりたくても

ゆう気がでないから

おり紙にお手紙書いた

おり紙を

紙ひこうきにへんしんさせて

ママの後ろから

ピューンととばした。

そしたら

ママが

ぼくにまた

紙ひこうきをとばしてきた

紙ひこうきを

ひらいてみたら

「あやまつてくれてありがとう。」

ママもこわい顔してごめんね。」

と書いてあった。

お母さんはいろんな色。

お母さんってどんな色。

やさしい時は、ピンク色。

おこっている時は、赤色。

お母さんってどんな色。

悲しくて泣いている時は、グレー色。

うれしくて泣いている時は、空色。

お母さんってどんな色。

わらってる時は、オレンジ色。

元気に働いている時は、レモン色。

お母さんってどんな色。

お母さんは、ぼくだけのクレヨン。

ぼくだけのにじができる。

お母さんってどんな色。

今日は、何色のにじがでるかな。

ぼくの宝物のクレヨンで。

ぼくは、クレヨンが大好き。

クレヨンは、ぼくが大好き。

お母さんは、どんな色。

うちは、停電です

明るいママが大すき

だけどママ、最近元気がない

頭の血つかんが広がって、いたくなる病気

だって…

私がおこらせてはつきりだから？

ごめんね、ママ

テーブルにクスリをならべて

「ラムネみたいねっ」って笑ってる

でも、つらそうだよ…

ママの頭を冷やしてみる

うちわであおいでみる

寒いとキュツてなるから、血つかんだってち

ぢむよね

そういえば、おばあちゃんが、お寺できわつ

てたっけ

治したいところをさわると、よくなるって、

おきもの

トラのぬいぐるみの頭をなでた

一番強そうだし

ママお願い、早くよくなつて

ずっと停電はいやだよお

ハンカチ

お母さんお誕生日おめでとう。

今年もハンカチをプレゼントするよ。

あの日お母さんは手術室に入るとき、

ぼくがプレゼントしたハンカチを

にぎっていたよね。

たくさん輸血して心配したけど

手術が成功したときは

とってもうれしかったよ。

ぼくのハンカチが、

お守りの代わりだったって言っていたね。

それからぼくは毎年ハンカチを

プレゼントしているよ。

今年はお母さんの好きな色のハンカチを

選んだよ。

これからも元気でいてね。

お母さん

「何でちゃんとやらないの!?!」

あくでたよ 十八番のどなり声。

そんなにな声出さなくていいのに…

ある日 お母さんがカゼをひいた

ぼくは 自分のせいだと思った

「自分がおこられることをしてなければ…」

治ったころ…

いつものお母さんじゃない そしたら…

「また何やってるの!?!」

おこりでした。

そしたらぼくの顔が いつのまにか

笑顔がうかんでいた

ママがいないと

ママがいるときは

さみしくない

なつやすみ

ママがいるとおもつて

はやくかえると

ママがいない

しんぞうがドキドキする

じいちゃんにでんわした

しんぱいになつてでんわした

もうすこしまつてなさいねつていわれた

ドキドキしてさみしかった

なくのをがまんして

いっしょうけんめいまった

そしたらすぐにママがかえつてきた

ただいまのこえをきいたら

なみだがでてきた

おこりながらおかえりといった

アヒル ダンス

きげんがいいとき

おかあさんは、

きゆうにおどりだす

でた、アヒルダンス！

おもしろくつて

まねをする

おかあさんのうしろをついていく

おかあさん、

おにいちゃん

ぼく

いもうと

アヒルのかぞくの

おさんぽだ

ある夏の日

おばあちゃんがはたけにやさいをうえました。
はじめは、小さかったけど

ぐんぐん大きくなりました。

トマトはまっかになりました。

なすはまっくろにひかっています。

きゅうりはトゲトゲで、いたそうです。

すいかは、まるでボールみたいです。

ある日、おかあさんがいいました。

「やさいをとってきてちょうだい。」

ぼくは、がんばりました。

弟やおにいちゃん、きょうそうしました。

やさいは、あまりすきじゃないけど

じぶんでとったやさいはおいしそうです。

あついあついなつです。

みんなあせいっぱいです。

おかあさんがわらっています。

ぼくも、わらっています。

お母さんはね

お父さんはね、

お墓をお参りに行く時

「お母さんはね、こういう

おかしが好きなんだよ」

「お母さんはね、こういう

飲み物が好きなんだよ」と

お父さんはたまに

お母さんの話をしてくれる

さみしいだろうな 悲しいだろうな

だから、お墓に行く時は、

「お母さんはね」と話をしてくれる

いつも笑顔のお母さん

ぼくのお母さんは、いつもやさしく笑っています。

ぼくがイタズラをしても笑っています。

ぼくがテストで悪い点数を取っても笑っています。

ぼくがワガママを言っても笑っています。

ぼくが病気になった時には、やさしく笑いかけてくれます。

ぼくのお母さんは、ぼくが一才の時に病気で天国に行ってしまった。

だから、お母さんの顔は写真でしか見たことがありません。

写真の中のお母さんは笑顔であふれています。

ぼくは、笑顔のお母さんが大好きです。

お母さんゆずり

僕の一重の目は、お母さんゆずり

頭にかぶって遊んでいた

運動苦手も、お母さんゆずり

仕事から帰ってきた母も

掃除苦手も、お母さんゆずり

頭にかぶって遊んでいた

何でも食べるのも、お母さんゆずり

思考回路も一緒だったなんて

オツと、背後から空手チョップがとんできた

ある時母は言った

「何でもかんでも、お母さんじゃないぞ、

「寛晃の笑顔が一番だな」

お母さんは言われなくても勉強したぞ」

お母さんゆずりですから

うーん、そこはお父さんか……

でも、僕がメロンにかぶせていたネットを

お母さん

えんぴつと消しゴム

えんぴつと消しゴムはパートナー

えんぴつが 書いていると

消しゴムがやさしく見守っている

「まちがえないようにね」

と言っているように

でも、えんぴつは、書きまちがえてしまう

すると 消しゴムはやさしく

「大丈夫 大丈夫」

と言っているように

まちがえを消してくれる

お母さんがやさしく見守りながら

「ころばないようにね」

とやさしく言ってくれる

子どもがころぶと

お母さんがやさしく

「大丈夫 大丈夫」

と言って

やさしく声をかけてくれる

まるで、お母さんと子どもは

えんぴつと消しゴムのように

パートナーみたいだ。

まるで えんぴつと消しゴムは親子。

子どもが自由に遊んでいると

おかあさんのせなかに

ぼくがだいすきなことは

おかあさんのせなかにとびつくこと

いすのうえにのつて

おもいつきりじゃんぷしてとびつくこと

おかあさんはころびそうになって

「あー、びつくりした。」

じゅんやおさるさんみだいだね。」

といてにこにこわらった。

ぼくもうれしくなつてにこにこわらった

おかあさんがえいとをだっこしているとき

ぼくはみつからないように

うしろからおかあさんのせなかにとびついた

おかあさんはころびそうになって

「じゅんや、あぶないよ

ころんだらどうするの。」

と、こわいかおをしておこった

ぼくはしょんぼりした

ねえねえ、おかあさん

だっこはえいとにゆずるけど

せなかはぼくのためにあけておいてね。

お母さんのひこうき

「ひこうきしてえ。」
ねる前に

ベッドの上で

お母さんに言ったら

「どうれ、上がるかなあ。」

お母さん

わたしの体を

りよううでとりよう足で

もち上げてくれた。

わたしの体がフワーツとうかんだ。

お母さんは、二年前

おっぱいの手じゅつをしてから

左手に力が入らなくなっちゃった。

だから、ひこうきやってくれるなんて
思わなかった。

「お母さんのびよう気がとんでつちやっ
たみ
たいだね。」

つて、わたしが言ったら、

「そうだよ。」

もうびよう気は、どつかへ

とんでつちやっただあ。」

お母さんは、もつと高く

わたしをもち上げた。

うれしくって

まいばん

ひこうきしてもらう

お母さんの元気が

うれしいから。

あかちゃんママ

ぼくの家のねこ

名前は はなちゃん

まだ0さい

いつもいつしよにあそんであげる

ひとりですすばんのときだつて

はなちゃんがいつしよなら、こわくない

だけど、あかちゃんをうんだ

まだ0さいなのに あかちゃんうめるかな

ぼくはしんぱいした

あかちゃんがうまれた時

そーつとはこの中をのぞいてみた

ちやんとあかちゃんにおっぱいを

あげていた

おしりをなめておむつこうかんをしていた

ちやんとおかあさんになつてゐる

ごはんをあげると

あかちゃんにわけてあげたり

一ぴきでもあかちゃんがたりないと

「ニャーゴ ニャーゴ」とよんでいる

やっぱり やさしいおかあさんだ

はなちゃんは六ぴきのあかちゃんの

めんどろをみている

ねこのおとうさんもてつだえば

いいのになと ぼくはおもつた

ねこおとうさんのかわりに

ぼくとおとうとは

あかちゃんとあそんであげる

そうすると

はなちゃんもいつしよにあそんでくる

やっぱり はなちゃんは

あかちゃんママだ

お母さんの耳たぶ

よるいねむりをすると、お父さんがぼくを
ふとんにはこんでいく。

さいしょはお父さんといっしょにねる。

朝目をさますと、ぼくはいつのまにか、ベッ

ドのお母さんのよこでねている。

そして、ぼくの手はお母さんの耳たぶをつ

まんでいる。

いつも同じみたいだ。

「また、いどうしたな。」

と、お父さんが言っている。

お母さんは何も言わないけれど、ニコニコ

してうれしそうだ。

だれかがぼくをはこんだのか？

よく思い出してみると、よなかに自分であ
るいていったような気もする。

ねぼけたぼくがお母さんの耳たぶにすいよ

せられたのかな？

目をさましたとき、お父さんの耳たぶをつ

まんていたことはなかった。

自分でもよく分からないけれど、お母さん

の耳たぶはやわらかくて気もちいい。

でもすこしはずかしいから、なにもおぼえ

ていないことにしておこう。

小さなおかあさん

「おかあさんがいないときは、おねえちゃん
の言うことを聞きなさいよ。」

「はい。」

おねえちゃんも

「わかったね！」

「はい。」

二人になるとおねえちゃんは、小さなおかあ

さんに大へんしん!!

いっぱいあそんでくれる。

けれどいっぱいおこられる。

おこると、本当のおかあさんよりこわい。

おかあさんとはケンカにならないけど小さな

おかあさんとはケンカになる。

ケンカはするけど小さなおかあさんのおおる

すばんはわたしは大すき。

またいっぱいあそんでね! 小さなおかあさん。

お母さんの絵

ヒマだったのでお母さんの絵をかいた。

さいしよはふつうのふくだったけどドレスに

かえてみた

お母さんにみせてあげた

でもお母さんは、「またこんな絵かいて。」つと

おこった顔をした。

「かわいくかけたのにな。」

私はかなしくなった。

その絵に手紙をつけてみた。

そうしたらお母さんがわらった。

そして「ありがとう。」といった。

わたしはうれしくなった。

次はどんな絵をかこうかな。

どんな手紙にしようかな。

お母さんはよろこんでくれるかな。

「ありがとう。」ってだっこしてくれるかな。

お母さんの夏かぜ

お母さんが夏かぜをひいた。

夕方なのに、ふとんでねている。

弟が

「ママ、おきて、おきて。」

と言っていたけど、

ぼくは言えなかった。

お母さんのそばにそつとねてみた。

あまいにおいがした。

いつもは弟のとくとうせき

ちよつとかりるよ。

ぼくはうとうとと

ねむってしまった。

目がさめたら、おなかに

タオルケットがかけてあった。

おなかがほかほかしていた。

お母さんのふとんは

空っぽだった。

キツチンから

ごはんがたけるいいにおい。

ぼくはほつとした。

もうちよつとだけ

タオルケットをかぶつていよう。

お母さんが

「こうちちゃん、ごはんやで。」

といつも大きな声で

よんでくれるといいな。

おっばい工じょう

お母さんのおっばいとつてもふしぎ。

弟は、

おなかがすくとおっばいをゴクゴク。

ねむたくなるとおっばいをチュツチュツ。

あまえたくなるとおっばいをパクッ。

お母さんのおっばいって、

そんなにおいしいのかな。

お母さんがわたしに、

「おっばいのもんでみる？」と言ってくれた。

「うん。」

わたしは、弟がのんでいるおっばいのはんたいのおっばいからぽたぽたおちてくるおっばいをぺろつとなめたよ。

まるでおっばい工じょうみたいにかくさん出てくる。

「とってもあまくていいにおい。」

弟の気もちがすぐよくわかったよ。

おっばいの人だら、赤ちゃんのころを思い出したよ。

わたしも赤ちゃんの時、ずっとのんでいたんだね。

弟もわたしもお母さんのおっばいが大好き。

お母さん、

あまくてあったかいおっばいをありがとう。

光るかあちゃん

かあちゃんが わらうと

いもうとのちなが わらう

かあちゃんが わらうと

ぼくもわらう

かあちゃんが わらうと

とうちゃんが わらう

かあちゃんが わらうと

犬のきらも わらう

かあちゃんが わらうと

おばあちゃんも わらう

かあちゃんが わらうと

おうちも わらって ゆれている

ぼくのかあちゃんは たいようだ

かあちゃんが わらうと

うち中が あかるくなる

きょうも かあちゃんは 光ってる

やさしいお母さん

ひと月に一回だけ

ぼくはお母さんに会える

ぼくは とてもうれしい

ぼくと会うと お母さんは服を買ってくれる

会うたびに 買ってくれる

この前はくつを買ってくれた

とてもうれしかった

ちよつとかなしいこともある

だって九九をぜんぶ言わされる

一のდანから九のდანまでぜんぶ言わされる

ぼくは九九がにがてだから いやだ

でも、ぼくのために九九を言えと言っている

のかなとも思う

だから がんばって九九を言う

お母さんと手をつなぐとあつたかい

だから、会った日はぜつたいに手をつなぐ

ひと月に一回しか会えないけど

ぼくは それでじゅうぶん

お母さんは やさしい

お母さんはやさしいから大すきだ

いつまでもやさしいお母さんでいてください

お母さん動物園

私のお母さんは

ライオン

百じゅうの王

でも ナマケモノ

いつつもねてるもの

昔は チーター

足が速かったんだって

今は カメ

私よりおそいよ

それから カンガルー

小さな妹のめんどろをみている

きのうは アライグマ

たくさんの洗たく物をきれいにしていた

たまあに パンダ

優しいよ

まるで動物園みたいだよ

お母さんひとりで何びき分なんだろう